

寢覺物語絵巻詞書考証

——「雅子君、冷泉院の左大臣の女御を訪ふ」場面——

鈴木弘道

一本 文

寢覺物語絵巻詞書に於ける「雅子君、冷泉院の左大臣の女御を訪ふ」場面は、いはゆる第三段第一枚、第一段第三枚・第四枚、に次のごとく記されてある。(註)

〔第三段第一枚〕

月入りがたのあけぐれの空、春秋の「かすみ霧にも劣らぬけしきなる」に、いと大きなれど、木だち「ものふり、いた」く荒れる所に、散りにし花のこず」ゑども、いと若やかに青みわたれる中」に、松の末より木高く咲きかかりた」る藤の、いとなべてならずもの「に」おもしろし。過ぎにし春の夢の「ひも忘れぬばかりになれば、車おし」とどめさせて見入るれば、しや「う」のことの「

〔第一段第三枚〕

音も「き」ゆなり。朝まだき起きたる」人もあなりと、をかしく

思ひやられて」ここよ、いづくぞとはせたまへば、故左大臣」殿の女御のおはするところなり」と申す。」まこと、さぞかし。いで、あはれを「ほど」なめるを、いますこし近く寄りて、花」をも見、琴の音をも聞かむ。「見つく」る「ひとあらば、往来の道にも過ぎ」難くて、なども言ひ寄り、さら「ば、しの」びてもいでなむとおぼして、「御くるまより」おりて、あゆみ入りたまへど、わづかなるとの「

〔第一段第四枚〕

る人は、明けにけると思ひて寝に」けるなるべし、人影はせず。中門につぎ」たる廊に歩み寄りて見たまへば、藤」は寢殿の東」巽の隅のつま」なるに、すだれをまぎ上げて、高欄に、宿直姿をかしげなる童寄りる」て、花を見上げたるあり。長押の上の」柱のもとにいたくみかくれて、唐」撫子のいろいろなめり。蘇芳をうへ」にて、あざやかなる薄色の裳、腰つ」ぎをか

しくひきかけて、和琴をぞひく。」

二 第三段第一枚

「月入りがたの」は、月が西に沈まうとする頃の、の意であらうが、これに類似する文が源氏物語桐壺巻に次のごとく見える。

月は入方の空清う澄み渡れるに、風いと涼しく吹きて、(註)
これにつき、松尾聡博士は、

「入方の」を「空」の修飾語として「入方の空」が清くすみわたると解くことも否定し去ることはできないが、それなら「月入り方の空」とあるのが普通で、「は」は加わらないのではなからうか。いまは「月は入り方の、空清う澄み渡れるに」として「月は入り方であつて、空が云々」と解く考えを可としたい。(時枝誠記博士は、この「の」を指定の助動詞「活用形は「の」だけしかない助動詞」の運用中止法と解かれて、同じく「入り方であつて」と訳される。)

(下略)

(四〇頁)

と述べられたが、寝覚絵巻詞書では、源氏物語の場合のやうに、「月は」とはなつてゐないから、「月入りがたの」は下の「あけぐれの空」を修飾するのを見て差支へあるまい。「あけぐれ」は、夜明け前のまだ少し暗い頃を言ふ。そして、「月入りがたのあけぐれの空」が「春秋のかすみ霧にも劣らぬけしき」であるといふから、この場面の季節は少くとも春や秋ではなく、し

かも「散りにし花」「若やかに青みわたれる」「咲きかかりたる藤」「過ぎにし春の夢」などの語句から考へて、夏であることは誤りないであらう。したがつて、冒頭は、夏の夜明け前の空の薄暗い風情を、春霞や秋霧のたちこめる麗々たる情趣と比較して、決して劣らないことを述べたものと考へられる。「けしきなるに」は、おもしろいけしきであるその上に、の意で、この「に」は添加を示す接統助詞であらう。「木だち」は「木立」で、木が群り生えてゐるものを言ふから、この辺は、木が古色を帯び、鬱蒼と生ひ茂つて、荒れた邸の有様を描いてゐるわけである。「散りにし花のこすゑども」は、桜の花が既に満開も過ぎて散つてしまつたその後の梢を言つたものである。「松の末」は、松の木の梢、「木高く」は、梢が高いこと、「なべてならず」は、一通りでないこと、を言ふ。「もの」におもしろし」の空白の部分は、藤田徳太郎・増淵恒吉両氏共編「校註夜半の寝覚」所収の「寝覚物語絵巻詞書」に「より殊」を宛てて□で囲む(三三八頁)が、それに従ふならば、他と比較して特別に趣深い、の意となり、藤の花の立派ですぐれた様子を述べたものと解することができるであらう。藤が松に懸つてゐる美しさは特に平安時代貴族の常に愛好したもので、枕(註五)冊子にも、

めでたきもの(中略)色あひ深く、花ぶさ長く咲きたる藤の花の松にかかりたる

(二六〇・一六一頁)

とある。「過ぎにし春の夢の□□ひ」は、「校註本詞書」に「過ぎにし春の花の匂ひ」(三三八頁)とあるが、字形から推定すると、「花の匂」の部分は「夢の□□」と読む方がよささうである。ちなみに、松尾聡博士の「菅原孝標女——その作品『夜半の寢覚』の形態について——」(註六)に引用された「寢覚絵巻詞」や橋本佳氏編「校本夜半の寢覚」所収の「寢覚物語絵巻詞」にも「すぎにしはるの夢の□□ひ」とある。けれども複製本によると、この空白の箇所は字形はきはめて不明瞭で、あるひは「おも」が「られ」を宛てて、「夢の□□ひ」を「夢の思ひ」とか「夢の憂ひ」などと解してはどうかとも思ふが、やはり明らかではない。しかし、雅子君がわざわざ「車おし」とどめさせて見る「気持になつたのは、つい過去の憂き出来事も忘れてしまふほどに、この荒廢した邸の情趣に心が惹かれたからであつた。「忘れぬばかり」の「ぬ」は打消の意でなくて完了の意であり、その終止形「ぬ」の下に「ばかり」が続いてゐる形と見て、この「ばかり」を、程度を表はす副助詞と解しておきたい。あたかも、「見入るれば」の主語は雅子君であるから、雅子君は、過去に於て何か忌はしい事件に遭遇したらしいことが推定される。

ところで、雅子君に纏はる忌はしい事件といへば、やはり一つは女三宮との恋愛による勘当事件ではあるまいか。したがつて、二人の恋愛は全く春の夢のごときはかないものであつたと言へるであらう。また、「春の夢」は、第一段第一枚に「には

かにひき放ち、ゆめなどを見さしたるやうなるあはれを」とあるのと関聯するのではなからうか。「過ぎにし春」といふのは、この場面が初夏の頃であるから使用したに過ぎない。「夢の」の「の」は、「のごとき」の意であつて、春の夢は短かくはかないから、雅子君と女三宮とのほかない恋愛を指したものと考へられる。松尾博士は、第三段第一枚と第一段第三枚・第四枚の場面を「まさこ冷泉院の左大臣の女御を訪ふ」と題され(二七頁)。

藤の花の咲く頃、まさこが、嗟忽びまかる所(恐らく女三宮の所であらう)からのかへり途に、冷泉院の右の大いどの、女御の家に立ち寄つた所であるが、恐らく女三宮に通ひ初めて間もない頃の「すぎにし春の夢」とあるが、また宮との關係が冷泉院に知られぬ以前(註七)の事、即ち「資料八」の事実以前の事であらう。

と述べられたが、この前半の説については後述することとして、後半の説に「過ぎにし春の夢」を引用されて、勘当事件以前のことと推定されたのはやや首肯しかねるのである。すなはち、雅子君と女三宮との恋愛が、雅子君の蒙つた勘当によつて無慘にも破れ去り、それがあたかも春の夜の夢のごとく短かくはかないものであつたからこそ、「過ぎにし春の夢」と表現されてゐるのではないかと思はれる。したがつて、この場面は、むしろ、二人の恋愛が冷泉院に知られ、雅子君が勘当されて以後のことを述べたものであり、少くとも「過ぎにし春の夢」とあることが、雅子君の「女三宮に通ひ初めて間もない頃」を解く

鍵とはなり得ないのであるまいか。

「見入るれば」の「見入る」は、邸外から邸内を眺める意であり、「しやううのことの」は、言ふまでもなく「箏の琴の」の文字が宛てられる。「岩波詞書」は、この箇所を「しやうう?」のことの?」(二八頁)とし、「この」次の二字につき、「この二字仮名にて東乃とありし様に見ゆ」といふ割註があるが、さすがに松尾博士らしい慎重さが見られて敬服される。「箏の琴」は、十三弦の琴である。

次に、第三段第一枚の詞書を通釈しておかう。

月が西に沈まうとする頃の、夜明け前のまだ少し薄暗い空は、春の霞や秋の霧(ノタチコメル隴々タル情趣ト比較シテ、ソレ)にも劣らない(趣ノアル)様子であるその上に、たいへん大きいけれども、「群り生エテキル」木々は何となく古色を帯び、ひどく荒廃してゐる所に、桜の花の散つてしまつた(ソノ後ノ)梢は、たいへん若々しく一面にずうつと青くなつてゐる中に、松の木の高い梢から咲き懸つてゐる藤が、まことに一通りでなく他のものよりも特別に趣深い。(春へ)もう既に過ぎてしまつて(今、初夏ヲ迎へテ)ゐる(ガ、ソノ)春の夢のやうな(雅子君・女三宮ノ恋愛ノ)はかないことも(雅子君へ、邸ノ情趣ニ心惹カレテ、ツイ)忘れてしまふほどになるので、「才供ニ」車を押し止めさせて邸外から中を眺め入ると、
箏の琴の

三 第一段第三枚

「音もぎゆなり」の「なり」は、伝聞・推定の助動詞で、下の「あなり」の「なり」も同様である。「朝まだき」は、まだ朝にならない早い頃を言ふ副詞で、これ以下「あなり」までは、雅子君の推定する内容を示す。「こよ、いづくぞ」は、「岩波詞書」や「校本詞書」にも「こよいつくぞ」と記されてゐるが、「校註本詞書」には、「此所は何処ぞ」(三三六頁)とある。ところで、複製本は「こよ」の「よ」の部分が不明瞭で、「校註本詞書」のやうに「は」とも読めさうな字形となつてゐる。しかし、例へば第一段第三枚の「御くるまより」、第二段第一枚の「寄りゐたまへる」「よろづ」、などの「よ」の文字と比較すると、「こよ」の「よ」の文字はやはり「は」ではなくて「よ」と記されてゐるやうに思はれるのであるが、ただ、さうすると、何か文章がやや落着かない。もつとも、雅子君が「自分の興味深く思ふのはかういふ所なんだよ。一体、ここはどこなんだ。」と、お供の者に質問したと解されないでもなく、一応、原本のままにしておくが、「ここは」とあるべきものが「ここよ」に誤写されたと推定し得る可能性も十分に認められる。なぜならば、複製本に記されてゐる「は」の文字は「者」「波」「八」「盤」「半」の草体であるが、この中、「半」の草体の「は」は「余」の草体の「よ」に誤写されやすく、このことは、池田亀鑑博士著「古典の批判的処置に関する

研究」(第二部 国文学に於ける文献批判の方法論)にも、単字の無意識的転化の例として掲げられてをり(四一四頁)、また、「若や」波」の草体の「は」も、もとの書き方によつては誤写される恐れがないとも限らないからである。

「故左大臣殿の女御」は、松尾博士の前掲岩波講座(二九頁)や、「校註本詞書」(三三三六頁)の頭註には、梅壺女御と解説され、小松氏は宣耀殿女御か梅壺女御であらうと推定されてゐる(七三頁)。ところで、この場面と関係のあるのは、拾遺百番歌合六番右に見える次の歌である。

曉、しのびまかる(二字 ABCD たる)所よりかへるとて、冷泉院の左のおとどの女御の御もとにまうで給へるに、朝まだきゆきゝの道のたよりにもすぎね山(一字 ABCD 心)はうれしかりけりと侍りけ(二字 BC ナシ)れば、

左(一字 ABCD 右) 大将まきこきみ

玉鉾の道行きずりのたよりにもとふべき宿はさしてこそくれこの歌の詞書によると、「故左大臣殿の女御」は「冷泉院の左のおとどの女御」であることがわかるが、「女御」と呼ぶ以上、「冷泉院に対する女御」であることは明白である。しかも、冷泉院は流布本寝覚卷五までに現れる帝のことであつて、この帝に対する後宮としては、流布本中に中宮・承香殿女御・宣耀殿女御・梅壺女御・登花殿尚侍が登場してゐるから、絵巻詞書の「故左大臣殿の女御」とは、承香殿女御・宣耀殿女御・梅壺女御の中の一人であると考へられる。しかし、「故左大臣殿の」と

いふ連体修飾語は、例へば、源氏物語桐壺巻で、右大臣を父とする弘徽殿女御のことを「右大臣の女御」と呼称してゐる(一五二頁)ことを考へて、これを「故左大臣殿を父とする女御」の意と見ることができから、要するに、この女御は右の三女御の中、その父が左大臣の官職にあつたものに限定されねばならないわけである。第一の承香殿女御は、寝覚卷一に、

御兄弟の式部卿宮の御女、承香殿女御と聞えて、(六頁)

とあるから、「故左大臣殿の女御」には該当しないが、第二の宣耀殿女御は、寝覚卷三に、

承香(きや)殿は里に出給ひにしかば、后(マ左)大殿の女御、宣耀殿と聞ゆるぞ侍ひ給へど(ト)は、(一九九頁)

とあり、また、第三の梅壺女御は、寝覚卷四に、

右の大殿の女御、梅壺と申御腹に、女一の宮、女二宮所おはします。(三三六頁)

とあるから、寝覚卷五までを範囲とすれば、第二の宣耀殿女御の父だけが左大臣であり、この父がその後薨じたと推定すると、「故左大臣殿の女御」にはこの宣耀殿女御が該当することになる。けれども、梅壺女御の父右大臣は、卷四以後も官位が昇らず、遂にこのままで世を去つたとは必ずしも考へられない。なぜならば、卷五には春の司召のあつたことが述べられ(三四〇頁)、その時に男主人公の内大臣は右大臣に昇進してゐるし、また、その後も末尾の関巻中で司召があつたかも知れず、この梅壺女御の父右大臣も左大臣に昇進する機会が全くなかつたと

は断言できないからである。かう考へてみると、梅壺女御も「故左大臣殿の女御」に当てはめ得る資格がありさうで、先に述べた小松氏の御推定は最も妥当であると思はれる。なほ、松尾博士がこの女御につき、

恐らく現存本巻四に説明されてゐる「女一宮女二宮の御母である冷泉院の右のおほいどの女御（梅壺女御）」であらう。現存本の右のおほいどののは左の大い殿の誤写であらうと思ふ。 (二九頁)

と述べられた誤写説は、別に確証もないし、また、右大臣より左大臣への官位昇進のあり得ることを考慮すると、俄に従ひ難いのである。

以上のほか、風葉集恋二の九一五番に、雅子君とかりそめの恋愛関係にあつたらしい「春宮の宣耀殿女御」なる女性に対して遣はした、雅子君の歌があるが、この女御は別に冷泉院の女御でないから、「故左大臣殿の女御」とは別人と見るより仕方がない。

「ところなり」との箇所は、「岩波詞書」に「ところなり」と(二八頁)とあるが、「校本詞書」では「とこりり」(三六〇頁)として不明箇所のみ空白のままにしてある。「申す」は、文字通り「まうす」の意で、お供の者の雅子君に対する謙譲の気持が見られる。「校註本詞書」は、上の「と申す」を含め、以下「ひとあらば」までを地の文とするが、文の内容から考へて、「まことさぞかし」以下「しのびてもいでなむ」までを、雅子君の心中を述べたものと解しておきたい。この場合の「ま

こと」は感動詞で、雅子君がお供の者の返答を聞いて、しばらく忘れてゐたことを「さうさう」と思ひ出したところであらう。したがつて、雅子君はかつて左大臣の女御と何等かの交渉があつたが、それも長らく途絶えたままであつたことが想像される。ただし、下の文に「花をも見、琴の音をも聞かむ」といふ目的が記され、また、邸の人に見つけられない場合にはそのまま邸の外へこつそりと出ようとする、雅子君の計画が見えることを考へると、特に雅子君とこの女御とが恋愛関係にあつたのではなささうである。これについて小松氏は、「まさこは宮中で育つたので、ちようど源氏が同様な事情で桐壺帝后妃と親しく、麗景殿女御をおとずれたりするのと同じように、冷泉帝后妃と親交があつたのであらう。」(七三頁)と述べられた。感動詞「いでは、「いますこし」以下「聞かむ」の文にかけて解くべきであらう。「あはれを」の空白の箇所は約三字分で、「校註本詞書」に「哀れをかしき」(三三六頁)とあり、「岩波詞書」には「あはれをち」(二八頁)とあるが、明らかではない。今、仮りに「情趣深い」とでも訳しておく。「近く寄りて」は、「校註本詞書」に「近く寄りて」(三三六頁)とあるが、「近く」の次の文字が「よ」であることは推定しやす。 「花」は、第三段第一枚に「散りにし花のこずゑども」とあつたので、雅子君が「いとなべてならずもの」におもしろし」と感じた、藤の花に相違ない。また、「琴」は同じく第三段第一枚にあつた「しやうのこと」、すなはち「箏の琴」を受けるものであら

う。もつとも、第一段第四枚の次に続いてゐる絵第二には、箏の琴のほかに和琴を弾く人物も描かれ、第一段第四枚に「和琴をぞひく」とあるのと一致してゐるが、雅子君の現段階に於て耳にしたのは「箏の琴」であつて、「和琴」ではないはずである。「見つくる」とあらば」の最初の空白箇所は、「校註本詞書」で「もし」(三三六頁)と推定する通りであらうと思ふが、今は慎重を期してそのままにしておく。

「往來の道にも過ぎ難くて」の「も」の箇所は、「岩波詞書」や「校本詞書」にも推定文字が見えないけれども、前掲の拾遺百番歌合六番右の歌の詞書に「ゆきゝの道のたよりにもすぎぬ山(一字ABCDC心)は」(圈点筆者)とあることを考へると、やはり「校註本詞書」に「行き来きの道にも過ぎ難くて」(三三六頁)とあるやうに、「も」と推定することは妥当ではあるまいか。ただし、「道にも」の「に」は、複製本でもかなり明白であるから、わざわざこの箇所をも□に包む必要はないと思ふ。

「往來の道」とは、道を行つたり来たりする途中の意であるから、「往來の道にも過ぎ難くて」とは、雅子君が故左大臣の女御の邸の前の道を往來する、その途中でも、そのまま通り過ぎにくいので、つい訪問したのだといふ、雅子君の女御訪問に対する経緯の説明と考へられる。そして、雅子君が、その後邸の人に見つけられて、この説明を實際に女御に対して行なつたことは、拾遺百番歌合六番右の歌の詞書に見える「朝まだき」の歌によつて明白である。すなはち、この「朝まだき」の歌は、

女御が雅子君に対して詠んだもので、「まだ朝にならない早い頃、あなた(雅子君)が私の邸の前の道を往來するついでに於てさへも、そのまま通り過ぎることのない心は嬉しいことだよ。」との意であり、女御は、雅子君の「往來の道にも過ぎ難い氣持を嬉しく思つて詠歌したのであらう。このやうに、女御が雅子君の心を「ゆきゝの道のたよりにもすぎぬ山(一字ABCDC心)」と表現したのは、雅子君が實際に「往來の道にも過ぎ難くて」と語つたからに違ひない。

「言ひ寄り」は、ここでは、物を言つてやる・申し入れる、などの意である。「さら□ば」の空白箇所は、「岩波詞書」や「校本詞書」にも、空白のままにするが、「校註本詞書」には、「さらずば」(三三六頁)のごとく「ず」を推定してゐる。したがつて、仮りに「校註本詞書」によるならば、「さらずば」は「見つくる」とあらずば」の意と解してはいかがであらうか。つまり、雅子君を見つめる人がゐない場合には、「花をも見、琴の音をも聞かむ」といふ志を遂げて、そのまま「しのびてもいでなむ」、すなはち、こつそりとこの邸から外に出してしまはうとする、雅子君の計画ではあるまいか。「御くるま」は、「校註本詞書」に「御車」(三三六頁)とあるが、複製本を見ると、「御く」の箇所だけが不明瞭で、「るま」の箇所は判読し得るやうである。第一段第三枚の最後「との」はもちろん第一段第四枚の冒頭に続いて、「とのゐ人」すなはち「宿直人」といふ単語を形成してゐる。

なほ、以上の第一段第三枚の場面は、次の第四枚の場面の一部や第三段第一枚の場面と合はせて、源氏物語逢生巻の影響を蒙つてゐると思はれるふしがあるが、これについては、後述する。

第一段第三枚の詞書の通釈は次の通りである。

音もどうやら聞えるやうだ。まだ朝にならない早い頃、もう起きてゐる人もあるやうだと、興味深く自然と思ひやられて、「雅子君へ」
「私ノ興味深ク思フノハ」かういふ所なんだよ、「一体、ココハ」
「どこなんだ。」と「才供ノ者ニ」お尋ねになると、「才供ノ者ハ」
「コノ邸へ」亡くなられた左大臣殿の娘で冷泉院の女御でいらつしやるお方のおいでになる所である。」と申し上げる。「雅子君へ」「さうさう、さうであるよ。さあ、情趣深い時であるやうだから、もう少し近く立寄つて、藤の花をも見、箏の琴の音をも聞かう。もし「自分ヲ」見つける人があるならば、『女御ノ邸ノ前ノ道ヲ』往來するその途中でさへも、「ソノママ」通り過ぎにくいので、「ツイ訪問シタノダ。』」なども言つてやり、もしそのやうな人がゐないならば、「藤ノ花ヲ見、琴ノ音ヲ聞イテカラ、」こつそりとも「コノ邸カラ」外に出てしまはう。」とお思ひになつて、御車から下りて、「邸内ニ」歩いておは入りになるけれども、わづかの宿直の者達は、

四 第一段第四枚

「中門につづきたる廊」とは、「中門の廊」と同義であり、これは、寝殿造に於て、東西の対屋から泉殿・釣殿に行く廊下を称する。「寝殿」とは、正殿の意で、主人の居間あるひは客

間として使用され、南面して造られた。「寝殿の東翼の隅のつまなる」は、第三段第一枚にあつた、「松の末より木高く咲きかかりたる藤」の位置を示したものであるが、複製本によれば、第一段第四枚の次に幅約四・二センチメートルの細い絵の断片（絵第二の一部）があり、さらに、この絵に引続いて、別紙に描かれてゐる第一段第四枚の場面とおぼしき絵第二の右端に、松の木らしいものが見えて、いかにも「寝殿の東翼の隅のつま」を暗示するやうに思はれるから、藤の位置は、おそらく寝殿の東側、東南の隅の軒端にあると見てよからう。「つまなる」の「なる」は、断定の助動詞であるが、ここでは存在の意を表はす。細い絵の断片には、簀子の近くに立寄つて内部を窺つてゐる烏帽子姿の貴公子が描かれてゐるが、これは、元來もつと幅の広い絵であつたことが想像され、車から下りて、「中門につづきたる廊に歩み寄りて見たま」ふ雅子君の姿を描いたものととれないでもない。しかし、それにしては同一場面の絵が二枚続くので、あるひは別の場面とも考へられる。「高欄」は、いはゆる欄干で、「勾欄」とも書く。宮殿などの周囲や橋・廊下などの両側につけるもの。「高欄」が、下の「寄りゐて」にかかるとは言ふまでもない。「宿直姿をかしげなる童」とは、宿直装束の姿のかはいい童女であらう。この童女の、高欄に寄りかかつて坐つてゐる姿も、絵第二に描かれてゐる。「花」はやはり藤の花である。「長押」は、ここでは、下長押のことで、母屋と廂との境として、横に渡した材木をいふ。「柱のもとに

いたくみかくれて」とは、柱の陰に深く姿を隠して坐つてあるさまを述べたもので、やはり絵第二にも見られる。「みかくれて」の主語が明示されてゐないが、先の「童」に対して別の人物、すなはち「和琴をぞひく」女の動作である。したがつて、「また一人は」といふやうな言葉を主語として補ふこともできるであらう。「唐撫子」は、襲の色目の名で、表も裏も紅色であり、夏に用ひるが、「唐撫子のいろいろなめり」とあるのは、文章として何か不自然のやうな感じがするので、一応、色がさまざま美しいといふやうに解しておく。「めり」は、雅子君が離れた場所から覗いてゐるので、はつきりしないために使つたものと思はれる。「蘇芳」も、襲の色目の名で、表は薄茶色、裏は濃赤色、ともまた、表は白のみがき、裏は濃打（濃い紫色）とも言はれる。これは冬に着用する。「薄色」も、襲の色目の名で、表は少し赤味がかつた薄縹色、裏は薄紫色または白色である。「腰つきをかしくひきかけて」とは、腰の恰好が美しいやうに、裳を覆ふことであらう。

「和琴」は、六弦の琴である。絵第二には、「童」と「和琴をぞひく」女性のほかに、その女性に対坐して筆の琴を弾く別の女性の姿が描かれてゐるが、第三段第一枚より第四段第四枚までの詞書には、筆の琴の音が聞えることだけを記し、その人物については何等触れてゐない。雅子君は和琴の音でなく、筆の琴の音が惹かれたのであるから、かへつて筆の琴を弾く人物についての説明のほしいところであるが、元来、第一段第

四枚の次にでもそれがあつたのであらうか。そして、この筆の琴を弾く人物こそ、この邸の主人、冷泉院の左大臣の女御ではないかといふ気がする。けれども、第一段第四枚の次に見える絵第二の断片は、複製本によると、その断片の絵の線の先端が第一段第四枚の紙にまでつき抜けてゐるやうに見えること（註一八）から、第一段第四枚に直ぐ続くもので、第一段第四枚とこの断片の絵との間には、本来、他の断紙がなかつたのではないかと想像される。したがつて、むしろこの断片の絵の完全なものと絵第二との間に、筆の琴を弾く人物について述べた、別の詞書が存在してゐたのかも知れない。

なほ、第一段第四枚で雅子君の垣間見する場面は、源氏物語橋姫巻に於て、薫が宇治の八宮の姫君達を垣間見する、有名な次の場面を想起させる。

あなたに通ふべかめる透垣の戸を、すこし押しあけて見給へば、月をかしきほどに霧り渡れるをながめて、簾を短く巻き上げて、人々居たり。簀子に、いと寒げに、身細くなえはめる童一人、同じさまなる大人など居たり。内なる人、ひとり、柱に少し居隠れて、琵琶を前に置きて、撥を手まさぐりにしつゝ居たるに、（中略）添ひ臥したる人は、琴の上にかたぶきかかりて、

（四二五・二二六頁）

もちろん、細部に於ては大きく相異するが、類似点を纏めると次の通りである。

寝覚物語絵巻詞書		源氏物語橋姫巻	
垣間見の方法	中門に続いてゐる廊下に歩みよつて垣間見る。	姫君達の居間の方へ通じてあるらしい透垣の戸を少し押し開けて垣間見る。	
垣間見した光景	簾を巻き上げ、簀子に出て、高欄に寄りかかつて藤を見る童女がある。	月がおもしろく照り、霧がかかつてある景色を、簾を巻き上げて眺める女房達がある。	簀子にみずばらしい童女がある。
	柱のもとに隠れ坐つて和琴を弾く女がある。	柱のもとに隠れ坐つて琵琶を前に置く女がある。	箏の琴の上に覆ひかぶさるやうにしてゐる女がある。

次に、この「雅子君、冷泉院の左大臣の女御を訪ふ」場面が、内容的に前の「雅子君、中納言の君を訪ふ」場面(註九)とどのやうな関係にあるかを考へてみよう。

まづ、前掲拾遺百首歌合六番右の歌の詞書に、「眺、しのびまかる(三字ABCDたる)所よりかへるとて、冷泉院の左のおとどの女御の御もとにまうで給へるに」と見え、松尾博士は、前述のごとく、女三宮の所から雅子君が帰る途中のことではな

いかと推定されたが、「しのびまかる(三字ABCDたる)所」とは、小松氏の指摘される通り、第一段第一枚に「うちしのびたづねおはしたるを」とあることから、これはやはり中納言の君の住居を言つたものと考へねばならぬだらう。しかも、第一段第二枚に「あかつきかくる月さし出でて」とあつたのが、第三段第一枚には「月入りがたのあけぐれの空」と変化して、時間の推移がはつきり認められるほか、季節も第一段第二段・第三段第一枚を通じて初夏の頃と推定されるので、左大臣の女御に対する雅子君の訪問は、小松氏説のやうに、雅子君が中納言の君を訪問したその帰途のことと考へて差支へないであらう。

この、雅子君の女御訪問場面は、前述のやうに、源氏物語橋姫巻を想起させるが、源氏物語蓬生巻に於ける、光源氏の末摘花訪問の条にも類似するところがある。寝覚絵巻の絵第二が源氏絵巻の蓬生の段に似た構図であるのも、決して偶然ではあるまい。蓬生巻の文は、紙幅の都合により掲げないが、寝覚絵巻詞書との類似点を対照しておく。

寝覚物語絵巻詞書		源氏物語蓬生巻	
初夏の頃、雅子君が中納言の君を訪問した帰途の出来事である。		夏四月頃、光源氏が花散里を訪問する途中の出来事である。	
入り方の月が出てゐる。		夕月が出てゐる。後、光源氏	

が記されてゐたのではないかと想像されるのである。
最後に、第一段第四枚の通釈を次に掲げよう。

……宿直の者達は、「モウ夜ガ」明けてしまつたのだと思つて寝てしまつたのであらう、人の姿は見えない。「雅子君ハ」中門に続いてゐる廊下に歩み寄つて「邸内ノ様子ヲ」御覧になると、藤は寢殿の東側、東甬の隅の軒端にあるので、簾を巻き上げて、高欄に、宿直装束の姿のかはいい童女が寄りかかつて坐つてゐて、藤の花を見上げてゐるのがある。「マター一人ハ」長押の上の柱のもとに深く姿を隠して坐つて、唐撫子の色がさまざま美しいやうに見えるが、蘇芳色の着物を上にして、きはだつて美しい薄色の裳を、腰の恰好が美しいやうに覆つて、和琴を弾いてゐる。

(註一) 以下、寢覚物語絵巻は、大和絵同好会刊玻璃版複製本(以下、「複製本」と呼称)を使用するが、詞書の翻刻に当つては、漢字を宛て句読点・濁点を加へるほか、文の各行の切れ目に「」を施す。また、仮名遣の誤り・誤字・宛字・踊字などは訂正し、その右側に原文の文字を()に包んで示す。□は、判読し難い文字を表はすが、強ひて推定した文字も□で囲んでおく。

(註二) 日本古典全書本(一六一頁。圈点筆者。以下、源氏物語は本書を使用する。

(註三) 「全釈源氏物語」巻一 圈点筆者。

(註四) 以下、「校註本詞書」と呼称する。

(註五) 日本古典全書本八十四段

(註六) 岩波講座日本文学。「平安時代物語の研究」にも収録。

(註七) 二八頁。以下、「岩波詞書」と呼称する。

<p>木立が古めかしく、荒れた邸に、藤が松の梢から咲き懸つてゐる。</p>	<p>と末摘花とが歌を贈答してから、月は入り方になる。</p> <p>木立が茂つて、荒れた邸に、藤が松の梢から咲き懸つてゐる。</p>
<p>雅子君は、この邸が故左大臣の女御の邸であることを思ひ出す。</p>	<p>光源氏は、この邸が故常陸宮の邸であることを思ひ出す。</p>
<p>雅子君は、女御訪問の要領をお供の者に語る。</p> <p>雅子君は、初めは邸に人影も認めなかつたが、やがて童や和琴を弾く女を垣間見する。</p> <p>雅子君と女御とは歌を唱和する(拾遺百番歌合六番右の歌による)。</p>	<p>光源氏は、末摘花訪問の要領をお供の惟光に語る。</p> <p>お供の惟光は、初めは邸に人影も認めなかつたが、やがて老女に案内を乞ふ。</p> <p>光源氏と末摘花とは歌を唱和する。</p>

かくて、雅子君が左大臣の女御の邸内を垣間見した方法やその光景の描写は、源氏物語橋姫巻の影響を受けてゐると思はれるし、主として雅子君が垣間見するまでの状況は、源氏物語蓬生巻のそれによつたと考へられるのではあるまいか。したがつて、寢覚絵巻詞書の源泉となつた、寢覚の末尾闕巻には、源氏物語との交渉について、おそらくもつと明瞭に指摘される事項

(註八) 三六一頁。以下、「校本詞書」と呼称する。

(註九) 前掲岩波講座。

(註一〇) 二九頁。「資料八」の事実とは、雅子君が女三宮と恋愛事件を起したために、冷泉院から勘当され、別墅白河院で女三宮附の女房中納言の君と歌を贈答した事実を指す。

(註一一) 前掲著書。

(註一二) 松尾博士「校本拾遺百首歌合(右)」(前掲著書所収)。以下、拾遺百首歌合は本書を使用する。

(註一三) 以下、流布本寢覚は橋本佳氏編「校本夜半の寢覚」を使用する。

(註一四) 前掲岩波講座。

(註一五) 春宮の宣耀殿女御いまた参り侍らさりけるにいさゝか
ゆきあひてあしたにつかはしける ねさめの右大将

九五 宵のまの夢はかりにて立わかれけさはいかなる心ちかはする

(註一六) 前掲著書。

(註一七) 「山」とあるのは、「心」の誤写であらう。

(註一八) もつとも、複製本の製作上、このやうになつたとすれば論外である。

(註一九) 第一段第一枚・第二枚、および第二段第一枚・第二枚。

(註二〇) 前掲著書七三頁。